

この人に  
聞く

## 「国際貢献」の夢を産婦人科医として実現 アジアを中心に女性の 健康増進活動に奔走

国立国際医療研究センター 国際医療協力局 連携協力部 春山 怜



中学生のときに「国際貢献したい」という夢を抱き、やがて医師として国際医療協力という道があることを知って、その道を真っ直ぐ歩んできた、国立国際医療研究センター国際医療協力局の春山怜先生は、世界保健機関(WHO)や西太平洋地域を舞台に、女性の健康増進のための活動に取り組んでいます。これまでの道のり、これからの目標などについて伺いました。

私は現在、国立国際医療研究センター国際医療協力局の連携協力部に勤務しています。WHOや国際協力機構(JICA)などと協力して、主にアジアの途上国での母子の健康増進の活動を進めています。二人の娘を育てながら勤務しており、多忙を極めますが、夫の協力を得ながら自分がやりたい仕事に打ち込むことができ、充実した生活を送っています。

### 医師として国際貢献することを目標に 途上国を中心に歩き回った学生時代

国際貢献をしたいと思ったのは、中学生のころでした。ダスティン・ホフマン主演の『アウトブレイク』という映画を観て、未知のウイルスによる感染症の怖さや集団感染に立ち向かう医師らの姿に魅了され、国を越えて海外で活躍する仕事をしたいと思うようになりました。高校生になり、スポーツ、美術、音楽などの芸術など、どんな形で国際貢献できるかを考えているうちに、「医師になり、専門医として国際医療協力」という道筋を知りました。私は「これだ」と思い、高校卒業後に東京医科歯科大学に進み、医師への道を歩み始めました。

入学後は、将来の国際貢献を念頭に、夏休みなどの長い

休暇や留学制度を利用して、アジアの途上国を歩き回りました。現地で人々はどんな生活を送り、どんな食事を摂っているのか、そしてどんな病気に苦しんでいるのかを自分の目で確かめたかったからです。タイでは3カ月間、地方病院での診療やフィラリア症の治療薬研究の手伝いをし、インドネシアでは3カ月間、薬剤耐性マラリアの研究に携わりました。6年生のときには、米国・ハーバード大学関連病院で小児感染症や女性診療の臨床を経験しました。

途上国では、貧困、不平等、格差という現実を目の当たりにし、医療を通じて国際協力を携わりたいと強く思うようになりました。また、そうした国々には多くの先進国から物資の支援、資金の提供がありますが、現地のニーズとかけ離れた内容であることも少なくなく、一方で海外からの援助に頼ろうとする途上国側の姿勢に疑問を感じることがありました。こうしたことをきっかけに、将来、どういう形で途上国支援するべきかを考えるようになり、それは今も自分に問い続けている課題といえます。

国際貢献を目指す上で、どの診療科を選ぶかは迷いました。当時は、国際保健分野ではミレニアム開発目標に基づく感染症と母子保健が中心だったこともあり、最終的に女性の健康全般に関わることができる産婦人科の道を選びました。

## 産婦人科の臨床から教員を経て大学院へ その間に二人の女の子を出産、多くを学ぶ

2008年に大学を卒業し、東京医科歯科大学病院と関連病院でそれぞれ1年ずつ初期研修を受け、その間、秋田大学医学部附属病院産婦人科でも研修しました。2010年に、東京医科歯科大学産科婦人科学教室に入局して、取手協同病院(現・JAとりで総合医療センター)で3年間、産婦人科医として勤務しました。

医師として5年目を迎えた年には、カンボジアでの手術ボランティアに参加し、限られた医療資源下での診療や手術をする中で、培った臨床技能を発揮することができ、とてもうれしく思いました。同時に、病院の外まであふれる患者さんに対しては一人の臨床医として直接支援するには限界があることも感じました。

2013年に東京医科歯科大学に戻り、大学病院で臨床医として勤務すると同時に、同大統合国際機構の特任助教として学生の教育にも携わりました。第一子を出産したのは、この時期です。グローバルヘルスに関する講義を英語で行うため、教科書や文献を通じて学問として向き合い、国際保健の面白さに改めて気がきました。

とはいえ、卒業後、5年間臨床医であった私には、教員としての知識が不足していたことも痛感しました。そこで、教員を続けながら、東京大学大学院国際保健政策学教室に通い、当時教授だった渋谷健司先生のもとで国際保健・公衆衛生に関する勉学、研究に勤めました。ここでの2年間で、世界各国の研究者や学生に出会い、グローバルヘルスの奥深さを学びました。また、2017年の修了前に第二子を出産しました。

どのような形で途上国支援に関わるかを考える中でたどり着いた結論は「国際保健の政策と医療の現場をつなげる仕事」でした。例えば、WHOが策定した規範・基準が、それぞれの国のコンテキストに合った形で政策として取り入れられ、それが保健医療サービスとして提供され、国民の健康の維持・向上という成果につながるまでには長い道のりと様々な障壁があります。私は、その実現に向けた道のりを長期的に支える仕事をしたいと考え

ました。

さらに、産婦人科医としてのキャリア、教員の経験、大学院で学んだことを活かし、子どもを育てながら、ワークライフバランスが取れる職場はどこだろうと探しました。そして第一候補となったのが、国立国際医療研究センター国際医療協力局でした。大学院修了後、国際医療協力局のホームページをみると、ちょうど医師の募集をしており、次女が生まれてすぐのときでしたが、思い切って応募し、2017年夏に採用となりました。私がやりたいと思っていたことがすべてできそうな職場だと感じ、とてもうれしく思いました。当初は育児時短勤務で、仕事も子育てでも多忙でしたが、こうして国際医療協力局での仕事がスタートしました。

## カンボジアでは子宮頸がん対策を中心に 現地に滞在して成果を実証したい

国立国際医療研究センター国際医療協力局には約70名の多様な職種(医師、看護師、助産師、薬剤師、検査技師、研究職、事務職等)の職員が活動しています。持続可能な開発目標(SDGs)のもと、ユニバーサル・ヘルス・カバレッジ達成に向けて、重点的なテーマである①健康危機・公衆衛生危機への対応と準備、②疾病対策、③医療製品のアクセス&デリバリー、④取り残されがちな人々(女性と子どもを含む)の健康、⑤新たな健康課題に対応可能な質の高い保健医療サービス提供体制と人材に対し、技術協力・政策提言・研究・人材育成・革新的事業の開発に取り組んでいます。

具体的には、医療職職員の約半数はJICA専門家や保健省アドバイザーとして、カンボジア、ラオス、モンゴル、ザンビア、コンゴ、セネガルなどに2~3年間長期派遣となり、現地の保健医療制度の強化、保健医療人材の育成、感染症予防対策の普及などの面で技術協力を行っています。国内では、海外機関との共同研究、外国人研修生の受け入れや国内の人材育成を中心に行っています。また「シャトル」と呼ぶ数週間の技術協力、調査、国際会議参加のための海外への短期出張もあります。



WHO本部で子宮頸がん管理に関する専門家会合を企画・実施(2019年2月)

私は現在、連携協力部に所属し、2018年からWHO本部の子宮頸がん排除に向けた世界戦略の策定や、その戦略を各国で実施していくための技術資料作成に携わっています。またこの5月には、WHO西太平洋地域事務局の子宮頸がん排除地域行動計画に関する諮問委員に任命され、各国でのHPVワクチン接種、検診、治療に誰でも公平にアクセスできる施策を考えていく予定です。このほか大きな仕事として、カンボジア産婦人科学会と日本産科婦人科学会による子宮頸がんプロジェクト(JICA草の根技術協力事業)の運営・実施支援があります。2015年から始まったプロジェクトで、カンボジア女性の子宮頸がん予防に対する意識向上、検診・早期治療手法の確立と質改善を目的としています。2015～2018年のフェーズ1では、延べ40名の日本産科婦人科学会の先生方に現地で、カンボジア産婦人科学会医師とともに、健康教育教材・プログラム開発、HPV検査を起点とする検診プロトコル作成、コルポスコピーやLEEP実習、そして事業対象であった工場従業員へ健康教育・検診を行っていただきました。2019年からのフェーズ2では、事業対象を小学校の先生としています。カンボジアではHPVワクチン接種はまだ全国導入されていませんが、9歳女子に対して小学校での集団接種として実施予定なので、小学校の先生の役割は重要です。新型コロナウイルス感染症の影響で、プロジェクトは遅れ気味ですが、オンラインで準備を進めてきた健康教育と検診プログラムを実施に移し、介入効果を評価

するという、当初の目標を達成したいと考えています。

これまでの私の国際貢献活動を通じて痛感したのは、日本でのやり方や経験に基づいて「教える」という姿勢は全く役に立たないということです。現地の行政がどんな施策をしたいのか、国民にどういうニーズがあるのかをとらえ、それをもとにお互いに学び合いながら人々の健康増進に寄与することが重要です。

そのためには数カ月の滞在ではなく、3年間ぐらい現地のプロジェクトにどっぷり浸かりたいです。グローバルヘルス(国際保健)とは、「世界中のすべての人々の健康を改善し、健康の公平性を達成することを目的とする研究・実践領域」とされています。私の国際貢献のゴールは、ずっと先にあると思っています。



カンボジアの技術支援対象病院で患者記録の流れを確認中(2019年12月)